けんぜん問答　全

イ 5
386

イ5
門 へ 10
號 386
巻
早稲田図書

乙酉三月十三日耽奇會

大名慳貪之画 圖載于漫録中　文寶堂携

慳貪蕎麦ハ俗に大名慳貪といへりそれハ大名とよびし由ハ諸侯方の紋をすへ絵かけるをもてなりけり此後世に憚りてあらぬくさくさの絵様を画きてハ猶その名ハ残りし之今こゝに載するハその紋を画かけはや大名とよべる称の起原を見るへくいとおもしろく又類ひあるまじきものなりおもふに寸錦雜綴ハ蕎麦器はり野乃舎随筆に折敷なるのせたり此會巳小寫山樓珍藏の汁子を録せり今文寶堂か此器を保せ見る時ハ當時もんどんの器のその全

きたなるに足れり
再楽に寸錦雑綴に今の灰水掻のたぐひは
や孔方一銭目にかゝるといへり　北峰記
右は漫録中けんどん器の圖上に予か題する所
なりして本日席上にて諸君に大名の名義はいかな
る解しゐへるといひしに桜江主の曰て大名は
くふべきなの義味ありといふ意なるよし聞へ
まふといはれしのみにて誰何と云ともなかり
けれは右の説を予はひしに桜江主のいとよろ
こびゐひて大名の名義初めて發明せりとぞめ
たまひしさて又輪池翁のけんとんて云名義は
いかにも聞もれしかはけんとんは慳貪の意よ

てより切にてあきなふ故にそのあつかひの慳
貪なりといふよしにてその名けしこけんとん
奈良茶けんどん野良等の名はありと答へしに翁
頭を掉て否しからずある書に見頓とあけたる是
なり頓は食の義にて行かくりは調ひ食するよ
しの名なりとのゐへりしが予猶其意を論辯せ
んとせしがおもひかへれども暗記の失あらんは謬り
ならく黙して止ぬその漫録の巡廻せし時曲
亭のぬしけんどんの名義を論して附すとぞ
北峯逸人美成記

大名けんどんは蕎麦切のみならで多くは温飩
なりしよやとおもふよしなりさ友醒と年ころ
大名けんどんのうつはものを秘藏して印箱に
しころはりそめうつは物は今の世指屋にて温
飩をいる物に似たり醒に設自京山に傳へて今
もそれの家になるへしさて又けんどん者は慳貪な
るよし又見頌なるよしさきの夜雨先醒の臭説
をかきへ聞もるさとを得たり退てひそかにお
もふに當時あきなひざかの慳貪なりとて買人
はさいふともいも賣る人のなきを嗚ふべくもあらば
又麪類ならでも食物にけんどんの名を負せし
は當時けんどん人の流行に從ひしものまで餘ま

れ菓子また蕎麦うどんのごとく箱に入れて処
々へ持出さしたけんどんといひし之又見頓と
物に書たるはそに記者のこゝろよりえしみ出
をし文字なりあふれやなべて広の書さが名と
は定めなさしきしは坊間の賣物に頓の字の義
などをよく穿鑿して唱もしむべくもあらねば
之をうらばけんどんなむのしは今は巻飩なる
を物には慳貪とし又見頓とも書たるにはあら
ぬの雅俗の用心今はさかいぼなと物ありされ
ば巻飩は箱よりての名にして大名は名によ
りて箱に画きしもかあるべし予が総角なりし
比は下いは蕎麦屋の障子にけんどんと書さるゝは

ありしを見たりけんどんは箱に入て処々へ持
出すの義にて見世賣のみなるを手打といひし
に今はなべて此ちまたにまとまりぬきて巻頓
といふよしは抑よそ麪類屋にて処々にもち出
すうどん蕎麦切の箱はそのかたち本箱に似さ
りよりて書巻の巻の字をかりて巻頓といひし
之今は蕎麦うどんを好むからけといふものに乾
海苔をふりかけたるを花まきといふこの巻の
字は巻飩の巻なるべし且むかしはそばきりよ
りうどんを好むは多かり予がをさなかりし比
までは店屋より麪類をとりよせるときは必温
飩かそばかと其人々の好みを問れしに今は温

飩をこのむものゝ稀なれはさることもなくな
りぬるうけ百人一首といふもかにあしつの山
やのうどん汁もよしなのくしきをひとりぬ
こらんといふ一老人の話ありかこれば大名け
んどんは温飩を旨とせしやとおもふなり抑
此あきつろひは三聖の醋を嘗ありと云譬の
似るべくもあらざめれどもきてえうなきくさ
むひも耽奇のうへまはもるさるやきなとむな
りにして二百歳の籍手あふてたゞさにに谁の
よくこの旨否をさだめん果を諸君子の口ふひ
くさにまかさん外はあふむなし　けんどんいふ出まへの分
るにて処々へもち
いだせの事なり

大名けんどんと唱へしは以右の箱の絵より
其名を得たりとも一定しがたしこれには愚
説あきにあらず称をいいたる山屋のうどんな
れはもふ一川よく諸君の評判記をきゝたる
うへにて二の分いりを出き通し

けんどん批考問辨
けんとんは蕎麦切のことなるべし多くは温飩なる
よし記されてもうけ百人一首の山やうと人の
狂歌を引用し猶老人の話を記しぬへと延寶九
年の印本都風俗鑑巻一都遊興そめ記のことを
いへる條に或いは蕎麦切ふかせて彼山川なんど
どん二とすこち三官飴さたとへてハ風味一流
かはりしのはやて嬉しかりと見へたりこれそ
のうみ温飩のこ多くは蕎麦切といひふましき
もおきや同しころの假名草紙にけんさんそば
は多かれとけんどん温飩といふ名目は見すさ
て温飩はむかしは多くは桶にて箱はまれこそ

のよし委しくハ友人柳亭子の考魂紙の考料ニ載てあり還
あれハこゝにいはす其器今の世庄屋にてうん
とんをもる物に似たりとあれと昔をもて今の
沿革ハ証すへし今の器の昔の証になるものか
いその証ハ鮓も今ハ多くハ箱につめるをなれ
ともむかしハ桶にのミつけたり近し耽奇會に吉
野の鮓桶の出しをあり収めて漫録中にあり古
製なるを見るに足れり亦温飩と同く一轍といふ屋
し又さんとんの文字見頓とあるハ假字なるを
ハ論をまさに巻飩といふハ實なに且今の出
まへのをにて箱に入て持出するの義とせるさ
れとそばうんどん茶漬まてハその名も叶へと

又都風俗鑑巻之三猥俗野良にうちまむその條に
むやうにまかせだちんの高下ありてあるハ大
夫といひ陰磨と名付慳貪野良といふか侍りと
あるハ何とかいもんこれも俗に云挟童とか異
名をるうくしものゝ類ひとせんか予ハ今の切
見せ女郎といへるをく一ト切りふりするもの
へいかにも情なく慳貪のあつかひなといふ意
なるへしと思へるハ非なりやされハ先キの
夜いひしをく蕎麦切茶漬もなりきりにて慳貪
のあつかひなる意に同しかゝる入く当時あきな
ひさぬに慳貪とそ買人にはさわとなるる入
の唱ふへくもあらすといひもれしハ一トせさり

理りハ志ゝあれと鄙俗の常言に異名の名目と
なれる少からぬに十月十九日の夜傳馬町にての
市をくされ市といふこれも買人のからさる名は
負セしなるへけれと今はうる人もこよひ〳〵
されは市にあきなひに行へしなといへるなるし
かゝるを考へ出ては猶あまさあるへくさてか
ぬへるをあれと二百歳の前あらはこの当店は
定めてんともいはれすその世の下の人の心志れさる
ものいと多かりいつれにもあれこれらを記て
えうなきをのをくあれとも事も必す名を正す
は聖門の旨とする所にして後学のためのなるか
セぬすへからぬに且は子か莫逆の友と思へは之

そらゝるよしなきなかをもいへるためなしるに
はあらす疑を質すは学者の常とするをもて切
瑳は朋友の道なるにや心置なく示したまへね猶
心よらゝることあらは又も問ひ侍るへし

乙酉孟夏朔

辨論約言

巻飩は初めその箱によりて名を得たり今の世
に至りても箱の上下に溝をほくりてその蓋を
さしこむをなべて巻飩蓋といふけんどんに箱
のかたち恰もよく書箱に似たりかくて出し入
るゝの僐を書巻に擬して巻飩と名つくその名
目甚妙なりされども当時のもろ人はけんど
んの名を知りて其字義を知るものの稀で譬へ今
おほそ頭中の名義を知りて流行詞の由来をも
しらず知るものゝ稀なるか如しかゝる故にや
巻飩は印本にもら正字を知（記）るさず多くはみな
假字にて書ざり流く真名にかくものは見飩な

作るもあり又慳貪にかよふて地口のごとく唱へたるあり是より名義紛雑して後人を惑しむ予が今かさねてこの書を綴るも職としてこれに由り蓋孔子の聖なるさへ猶慎氏の矢を識るをかたく竇終軍の博なるされど豹鼠を謬り易からんに古来博識達観のよく物を辨じゝる今さら挙て数ふべんやひとり予がと把不知庸才この余論をつくるに及て数万言に至るまでて畫ことゝして終人の眼せざらんことをおそるのゝ嗚乎談何ぞ容易ならん悵然として太息し又自笑して燈下に誌す

けんどん考釈

予濁り謬て耽奇冊子に附られし慳貪蕎麦の説を否して更に巻鈍考一篇を添しよりゆくりなく足下の怒りに当りこの故に足下まゝ予が説を語りて数條を引て質問せらる言の旨否いとまれかくまれ予は壮年より老輌不争の言を甘なひて人と争ふ事を好まず一時漫戯の雌許なるものを怨念して又何をかいふべき即この故をもて推辞され昔先されず将其答をきかんといへる答るときは罪をまさん又答へざれば証さりとせられん悔といへ昔駟も又及ばず実に已むことを得ざるの義なりよりて又その次第を追て答付るを左の如し嗚乎信言は必美ならず美

言ハ必信ならず予か言ハ美ならぬも信なると
ハ必信なりみづから熟讀再思して海容せられ
ハ幸ならん
詰に云けんどんハ蕎麦切のことならず云々
釋て云けんどんハ蕎麦切のことならず多くハ温
飩なりしよしハけどんのことハ即温飩の飩の
字なるにても志らるさて蕎麦切も一椀の價下
直なるものハきふ之持出し出すへなるものか九
けんどんそばといへる之甚詫ハ延宝四年の印
本江戸惣鹿子春ハ諸商人の部に温飩粉そば神明前
浄雲 浅草ひやうさんやとあり此温飩いうと
んの粉にて拵ふやにて賣にやとおもひしに元禄

五年の印本万買物調法記に江戸にてそうめん
べ不り江町通り同籠そうめん云く同めん類や
神明前浄雲 浅草ひやうたん屋日本橋北西中
通り芝金杉橋通り新材木町南通りとあるを見
れハ惣鹿子ニ所云温飩ハ粉たはふ乾うんどん
ん蕎うんどんを賣る麺類屋にてそは粉を兼ひ
さぎしなり是より拵ましき証ありそれ又下
にいもん又惣鹿子の商人の部に見頓屋堺町市
川屋中大ら町きり屋とありて又その次に同提
重堀江町若なや町新橋出雲町とありて此見頓
屋と志るをしハ則巻飩屋にて一椀の價を二六
か二八に驚きしものハ殊に名たゝる店なるへ

し又其次なるけんどん提重といへるハ大名巻
飩のことなり後世隠売女ハ提重と唱るもの
あるも其名目ハけんどん提重より起りて売女
の持出し出前を旨とするより名付し之又同書并
ニ買物調宝記にても温飩籠さうめんハ載たれ
どもそば切をのみ売る店を載さりしハ当時蕎
麦一色の名店なかりし故なり只これのミなら
ず天和三年の写本紫の一本下巻に記る処の名物
をつらねし條下に池の端のめりやす煎餅是の
三官飴ハ唐飴なり飯田町の壺屋がうどんたし
し候とあれどもそば切のなしこれにて見る
時ハ温飩を好むもの多きにより温飩の名店

多く扱うとんやなてそばきりを兼ひさぎしと
ハきこえたり饂の間なるふ元禄のなかばより
宝永に至りてハそば切にも名店いで来しこそ
は当時の風俗を書たる草紙にてしらるゝこさ
ハれこれよりまなを後なる二代目市川團十郎
柏莚なるこがはじめて出たりといふ助六が歌舞妓狂
言ハ正徳三年癸巳の春四月木挽町なる山村座
にてなせしこの狂言に助六がかんぺう門兵
衛の頭へうどんかくるもあれハ温飩ありこれも今
の世に初てもある狂言なれハ必ずふつみけ蕎
麦なるへし志するを温飩にて今もこの狂言ニ
その形を追ふてきなるハこの時までも扱うど

んを好こし人の多く濁く酢も亦多かりしによ
りて之又昔のうどんは桶にて箱は稀之といい
るさも柱に膠をするの論あるへしむしめ温飩は
桶をもちひしもけんどん提重といふものゝ行
はしより遂にその桶はさされしこよしや其
店までも桶に入れて商ふ店ありとてもこれを
買ふ人そのまゝ桶に箸を入れて食るへきもの
ついてうち盛に人その器の必別になるへき之
又酢も昔は桶ありしを今は箱あるをもて温飩
と同一轍といふへしとはすいすてそや昔の
酢は今の酢と同しからすそその製作もやさも一
二旬おそきは両三月よく漬ありにして後に飯を

なうひ語して押てくふへりかくれは是を讀る
に桶なうては宜しからすとす今の酢はその日
に漬けてその日に賣たくしその日に食ふものの
なれは箱のかゝを便利とすさゝをもて酢は製
作調理に今昔の差別あり温飩はさる差別なし
むかしの温飩も今の温飩も製作調理同じいら
でゝ同一轍ともいふへきものならんや彼古人山東
庵か蔵書とし大名けんどん人のうたてものゝ今
のそばの店屋にてうどんなともる物に似たりとい
ひし温飩は製作調理は今昔相同しきによれ
ることされは物によりて今と昔とはいさゝう異な
るものあり酢のさくひ是之昔と今と相同しき

ものあり温飩そば切の類是を且うどんの桶も
鏑も并に外盆ありそを盛るものは餘れ壁に引
べくもなきに且そば切の器物は予が小児の頃
の皿なり今に多くは平をも用ひ小蒸籠又丼鉢
をも用れど温飩のみそのうは今もの小箱の如
くなしたるものにて一トさびうつりかはらず五
十年来おかしき物之事かはらざりし以前いづれ
の世にかもしありけん大名けんどんの行逃し
比より今の如くなりしかも知るべからず又け
んどんを物に多く見頓屋と書たる人あれども慳
貪屋と書るものをいまだ見ず只巻飩慳貪と
同音なるにより慳貪にかけて慳貪と書さる人

あきとなそ人飲連歌のいひかけなひとしき言
葉なりまさしく慳貪屋と書さるもまなられ人
証とおかさしや、これハ見頓なりといへるも猶
よりどころあり慳貪なりとせらるゝハ假名を見
て眞となすにあらずや後の物なから深川珎者
録〈宝暦五年の写本〉小巻飩と書さるぞ正字なぞ有ける
又けんどんそはといふハいかにとけんどん温飩
といふ名目を見ずといもすゝハ勿論の事にて
けんどんすどんハ則うどんの飩なるまよりけ
んどんといへハ温飩の義その中まこもれりそ
れを抜けんどんうどんといへ一ト重句になるな
りこの故に蕎麦切のみふけんどんそばと唱へ

てうどんにハ志なとなへずけんどんにて通す
れハあり又按るにけんどんハ昔京大坂の市
中に　店屋なし万買物調寶記いろはわけの
下にも江戸のわけんどんや堺町市川や同中はしおけ町き
りや同不りへ町せうなや同さけがう本町同新
むし出雲町とミえたりかゝきハ都風俗鑑に当
時江戸流行す巻飩を物もひよせて彼山川かけ
人どんありとかこちこ云々といへるのミこれそ
の岐の慳貪に巻飩をかけたる言葉なれハ誤と
すべきものにハあらず蕎麦切によせたるハ昔
之とてそバ切のあきにあらず既にけんどん人そ
むの名目はれハ之

詰る云又けんどんの文字見頓と書るハ假字な
ることハ論を俟ず云々
釋て云見頓巻飩(頓)に×并ハ既に始て、ひ前条に
述されハこゝにハいはず物都風俗鑑に慳貪野
郎とあるをも一ト切りの無情慳貪の意とせう
るれどそハ甚しき誤之大名けんどんなけんと
ん提重とも云をもて解すへし上の慳貪ハ假字
之抑当時京摂の戯作者靏文流一鳳のともあり
江戸の事を書さるにハ侍聞の誤あれハすべて
ハ証とながたきをはりさんれ巻飩慳貪同音な
れハ相かけて唱へんにハ然むへきまはふねと
も大納祇園嶋の内なる色里ね山より白人より

蘓子等に至るまで一生の花を定めはりて切り
うまらぬものハなし一ト切りはゝふうる故
に無情慳貪の意ありとせバ彼等もなべて慳貪
といふべしかゝれバ慳貪野郎といへしゝ提重
蔭馬といひまひとしく寺々に抔へ赴て色を鬻
きしものまやあふん為かれとも流行詞ハ轉を
る事も多かれハ物によりて慳貪の心をもて呼
ぶハ地口ふちかしそれふをべて特諺なれハ
巻飩の名ふハいよ〳〵遠かりける類ハ草採、
の戯作を引までもなく紫の一もと巻上三本の條
下に吉原の上をしるして右のうさ江戸町揚屋
町京町といふけんど人河岸といふもあり角町

新町のうふを羅生門といふと見へたりけんど
ん河岸ハ五つ不年の事よして享保元文中の細
見記の直段付に㊀かくのごとくなるしるし一ト
切を情慣貪なる意をもて名づけゝりといふも
人愚按ハなきにあらに当時の不年の異名
を四寸ニ寸といへり今ハ之を四六と云文五つ
不年を一寸といへり又品川まてハ二百文の飯
盛を鉄橋と異名せりこれ皆その價によりて異
名を得たりこれらの例を思ひよするふけんど
ん河岸の名ハ彼けん此ん提重の一箱を壱人前
として其價百文づゝなひさくふ拵して一ト切
り價百文ッゝなるあそびなるハ一つ不年なれハ

これをけんどん河峯と異名したらんと思ふな
りこれ轉語なりかゝるはけんどんハ元来指出
しを旨とせしより其箱によりて唱へもしめし
もなれどもそれより又轉じてこの價廉なし
て卷飩に等しきもの或ハ大名けんどんに擬し
てうつもの奇麗にて人前の價百文なるものを
もけんどん飯と唱へしもはやる盛り切りに
情慳貪扱ひの義に依りて今の一膳飯并めしなど
類馬かご駕かきぼて振りの商人等がさしく
食ふ物なりし事買物調宝記其他の書にも江戸
名物の部にのせてけんどんめし金龍山同めぐ
ろ同不川おもかごや同かり金やなどなるもの

をへくルあふにクしされハ昔々物語巻下ニ云温
飩蕎麦切昔ハ町中ニ拵さるを歴々喰ふをはせ
す寛文の比ケンドン蕎麦切と云物を拵出し中
近年歴々の流ル喰ふ結構なる砂表へ上ル迄大
名けんどん杯と云て拵出スといへるを取合せ
考ふべしけんどんハ慳貪の意にはあらず又大名
といへるもその箱の繪模様より名付さるにあ
らず貴人の口にも入るといふ意にて大名けん
どんといへりより後には諸候の求しるしさへ
つけさるなり又けんどん蕎麦切といへる
ハ指出しの温飩そば切と云にはあらじいかでも
しれたるをなおふ同書にけんどん人そば切とい

な物を拵出してあるにてけんどんと云名目ハ
賣るものより名付はじめしとも明ならずこれら
みな慳貪の意にかなへるの明證とすべしさて
まこと予が買ふ人々慳貪といふとも賣人の志々
唱ふべくもあらずといひしを語りて十月十九
日の夜傳馬町にてたつ市をくされ市といふを
もて證とせらるれどそハ昔の事をもて今の證
筆を記すへし今の器をもてむかしの事の證と
ハしがたしといわれしに觝觸せりこれも又今
をもて昔の證とせるにあらずや只今の傳馬町
なる市をくされ市といふことハ昔より唱へ來
れるものにて今の人の唱へはじめしにはあらず

この故に今の世かの市にて高人もくされ市
といへるあり其市もし今の世にもはじまりたら
んにハ縦令不景色ありともゆきあふれのこゞ
なふくされ市と唱ふべくはなきちかごろ播
磨の赤松壽安その祖を罵りしと呼り是かの
人の祖ありといへども則祐満祐など十數世昔
の人なる故に罵りもせめその祖父その親の不
義ありとても人の面前にて罵るものハあらず
ゆゑしかのくされ市もさのごとし市ハ數十人の市
なしてその身一人の商ふにあらず且むかしよ
り異名せられしなれハ人のくされ市といふ
をも氣にかけずみづからも戯れにハくされ市

と云事はあらんもし一家一人のうへをもて汝が
店はくされ店あり汝が賣物はくされたる物な
りといはゞ誰か猥に怒らざるものあらんや
きたるをみづからもまた店はくされ店ぞこれ
等の代物はくされたる物なりといふてあきな
ふものはいよいよなしこれ人情のおのづからしか
かる処にして此の人情によく渉るを戯学のも
さらきといふべしかゝまゝけんどん人が慳貪な
るは当時買ふものゝさいふとも賣るものはな
を唱ふべくもあらずといへしはこれ人情のな
なる処にして昔より呉名せられしくされ市を
今の世その市に出るあきんどの云々と唱ふると

日を閲して語るべからずもしけんどん人は盛り
切り主情慳貪の義にて唱はじめたらんには当
時怨麻子その他の書にけんどんやと記して
梓せしときそのけんどんやは必怒りてその板
を削らざるまじき事なるにかゝる事は
露ばかりもみえずしてその書のたえまで持は
まるいまより切り主情慳貪の義をもて唱ざりし
なれば寛政中ある人が作りし猫じやらしと
いふ小冊は或國むかひある金々猫とかいひし
賣女の事を書るものありその書出板のころか
の賣女は猫とかゝれしを恨み怒りてかれこれ
と論りたるよしを聞きたき又おなじ此ある年か

天王祭りに小伝馬町にてあまた出せし地口行
燈のうちに大雨車力を流るといふ地口ありし
をその日まりある車力どもいたく怒りてその
行燈を出せし店を破却せしことありきかゝれ
いけんどんが実にもり切慳貪扱ひの意にて唱
こふんにはそのけんどん人やたるもの証かうるを
しと思ふべき扱せふるゝに及びてはさかりを
いひたつべきをぞりしらかれども昔より唱へ
来て今の世に至らばさまでいかなるをいあるべ
からずこれくされ市に相似たる邇近人情の差
別あれども今の世はうまれかくまれ昔かのけ
んどん屋の障りをいひし事あきふてもすは慳

貪扱ひより名付しと云言を取ふたがらのこい
むゝされいこそ印本には慳貪の字をむいかり
てつざと見頓屋と書きりあるといふ説もいと来
つべし見頓はともかくも印本に多くは倹名に
てけんどん屋と書きりこのけんどんは巻鈍よ
も慳貪にもかよへいは慳貪の方あらずと云ひ
つるは互かさなるべし大名けんどんに大名の
字を憚りてけんどんと提重と書させる例もてけん
どんは又慳貪の式あらは印本には遠慮して温
鈍ともそばきりとも切とかくべき事之されふの唱に
遠慮せず又聊も障りありしは慳貪扱ひある
意に依て名付しをふあらぬあるべし

詰ふなさてのむへるとあれと二百歳の翁なら
ハ云々
釋て云二百歳の翁なりすハこの寓居ハ室めく
こなたんと書志らせしたまふと、して云と
いはるゝハ足下にハ似げなきなりすや縦二百歳
の翁なりとも必しこその寓居を知れりと定がさ
きる足下の語をまさすして信し志なりとも
し志あるに予か寓居を先仙に託せしハ詮験す
べきよしもなき往昔市店の事なれハ予か説を
なれりとたしかにハ於いハでみゞなふ必勝の
地になきりしこれ論証のふけ道にて足下の
鼻をひしがんとせしロぎなりぬをあらはす

たゞおれのみならす彼記におゐてハ足下なりし
輪翁と推量て先醒と稱したりこれ又其説を否
されとも足下をもて批しとせす公道人情両つ
なからうしなハしとてのせざなり志あれとも
日ごろにおゐて足下を先生と稱せさるハ是又
故ある事ぞなし予が人を稱呼せることと譬ハ階
級あるかごとしいかにとなれハ儒学國学詩歌
書画の類これによりて俸禄をうくる人これに
よりて口を糊ひ妻子を養ふ人ハ俗に云黒人(クロヒト)な
りまゝ在山てその学の浅深と技の巧拙にかゝ
ハらす往来の書牘におゐてなべて先生と称せ
ふ之これ敬諂ふになぶ凡門戸を張り徒弟を

集め学術技藝をもて世をわたる人にハ只外飾
を旨とするものなれハ往来書牘の端にまで心
を其人の為に用ひて外面よかれと思へバなり
この他博学多聞能書好画の人といふともさま
によりて俸禄をうけず是をもて活業とせさる
ものハ俗にいふ素人也この故に予ハあへて之
を先生と称せずこれを先生と稱せずといへ共
その人おのつから生業ある人の敬不敬に依り
て外面損益に拘はるものならねばこそかれと
云官禄ある人においてハこれを大人と稱し或
ハ徳行或ハ高寿の老人家ハ文墨をもて業とせ
さるものといへ共これを大人と称敬し先生と

称することも稀になれり又予か如きものをも人謗
て書牘に先生と称するものあれハ予も赤心を
其人を先生とす是甚敬をうへきの氣也予か用
心をへて斯の如し志なるに予かけん人の評
記におゐてハ足下を評して先醒ときこれ他なし
し偏に足下の説を拙なしとせさるの意をあつ
をこされとも足下にハよくおもハむや予を貶
して予と称せりその往来間報今の礼節をもて
見れハきなふ師弟の如しなとてみかなる尊
大なることかくの正くあるやこれなあしなか
ふつか薄徳の致す処足下の故にハあらずあし
とにもかくにもせか心の通せさるを歎くのあ

まり言のさゝに及べるのミ翔又二百歳の翁ハ
さらぬ今のものの今去れぬを多しといへる
今の事の今忘れさるハ億万の人に問ハゞしる
ことなる指有べし往昔市井瑣々たるひとの既に
侍を失ふものハ経験を心ぎなしなきに只古書
に拠りてもハりの当為たるを取らんのミなお
れ某是等の引書ハこゝに坊間の旧籍あれハ擇ふ
とおもふとの蹟あれハそれ引書もあさのこゝ如
たし孟子に所云尽信書不如無書といへるハ是
ありかゝる瑣々たることをもし名を正すハ聖
門の旨とする処後学のものゝ怨にもへならぬそ云
云といハずしたまれ全弧玉弦にて割鶏牛刀の

類になふさやかのけんど凡と唱一しものハ近
世市鄙の賣物之よしやその名目をよく考得たれ
りとル聖門名教の為にハあらふを又考誤りたれ
ハとて名教の害にもあらぬを思ふ汝といふとも
恥にあらず知りたれハとて誉れにもあらず単
に遊戯の漫録にて根も葉もあるべきをあらね
ども予を莫逆の友と思ハゞ夫そあがくしきこ
とをいへといハるゝハせめてものをにお不
へていと煩しきるにあらんさふハ予が本心をあ
かさん欲およそ交遊の間にハ只その友を択ぶ
に係り擇て之を得たらんにハ互に信を尽すべ
し朋友と交て苟も信なきハ士さるものゝ恥る

所寧信なからより交らぬにまさこてなしとお
もふによりて勤もされハ世の人に疎ぜらる予
かこの二十許年来客を謝し帷を垂れて閉括し
たるもこの故なり近ころ多くハやり棄て世と
推移らんとおもへとも下愚の痼疾ハせんかた
なしさるにより猫虎の弁をもとめとして慳貪
の記にも批を添しハこれひそかに足下の為に
規律の微意なして冀くハ暁ることもあれかしと
おもへるのミ予か固陋寡聞なる足下の蘊博強
記にくらへハ雲壌の差なりぬへしされとも
予ハ足下の齢におなしきむかしさへもてる
ものゝ論して足下に勝りたりとも人めかめに

せれハ文事なふことハ思にぬものをいおてか
長短巧拙をもて争ひを好んや其足下を足下と
して愛せる心の已まことを得すいさめにかえゝ
るつざなれともまなりよし此拙き故にや燃る
薪に油をそえて遂に足下の怒りにあへりか、
れハ又何をいふへきそか誤りを悔るの外なし
し足下はいかいつ迄も慳貪の説を持し給へ予ハ
巻鈍をよしとおもへと名だけもトめし人に遭
まハ経読む居ハ終にはかたしあながちまし
先のくりもとにえうなき筆を費しぬけに事多
き世にこそ有されハ

けんとん考餉解

釋詁の一篇委しく記しおふし給へるを不爲支辞勞の言空しかふに心下かけねへるの厚き謝するに処あし予かけんとんの名義を問ひ侍りしを語るとしは未ねふに思ひはよふすまし未り思ひ給ふるましはあらんかとて問侍りし支のまことハ侍りしきてとんとんの名義及ひ温飩の器物飾の製造に古今の異あるをまて詳にその比の書とも引記し答しねへるを博且精にして敬服をるに堪たり聞一得三との如く実に望外の至にこそはれ予先に席上にてこんとんハ惺會の或あるよしいへるはかは予か臆

断トハあらす牢本洞房語園北女閭記原人倫訓蒙図彙世事談綺の説によれるまてこその説の旁居ル姑く置これハ再ひ辞するにハあらすたゝ予か言の妄ならさるを証するなり予か聞に二百歳翁云をといふより辞し給ふとく戯れの遯辞なるハ志りなからも聖門の名教なとにけあきるまて志るしたるハ予ル同しく賛言し付りし之志られこル予か性ルと滑稽なられハ思ふ予の通せすや怖りけんあしなしとさへ書きたるハこれまれてありけりこれまてハいかにるゐるへしもとより詰るにハ得ふて疑を聞え意なれハこさて予を先生と称されしに足下を

子と称したるを貶せるとゝとかめ給へるハいかなる意にやこれも予か意にハ辯論せられしやうのことにて志るしたるにハあらす先そかよしをいはゝ予ハもとより商賈なり尊称をもとめさることハいふまてもならす人をおとしめいむ人心もなし足下の人を称するに階級のあることもいまたしらすそハ先に老をもて称せしに老境に入る人と老をもて称さるゝハこゝろよからすと忌嫌ひ給ふものから子をもて称したりしを貶せしと思ひ給ふハ予か意とハ齟齬せり論語義疏に子是有徳之称古者称師為子也といへり孔子孟子程子朱子の称をもて見るへき

のミ又論語之書成於有子曾子之門人故其書獨
二子以子称と程子もの占へるものなや尊称に
ほふすやこゝをもて予ハ足下を子と称せしハ
敬するの心にて貶せる意曾てあくかつ予ハ足
下を莫逆の益友と思ひたれハこそ先にも兎園
の非を弁せられしを深く心にうへあひ殊又け
ふとんの戋も心置なく問ひ侍りしハこの故之
ありるを語ることし貶るとせられしハ予か愚卒
の筆に出る罪とやいもき人足下の名天下に晋
く著述の多き且ッ才と云齢と云予と日を同
しくして語るへうらすありれとも予か不才あ
るを山海の如く离れ給へるハ同好のよしみを

ミてあるへしされハかへすくもおもひしめ玉ハ
んや予もとより争は好ます怒る心ハつゆ不
どもあし互に辯し尽して後蔑然を出すこそハ
意趣をさしをさむ常人の事にして吾輩の真心
にハあふすゆゝるうもそと交情を厚きに任せ
ておもふかきりを問ひ侍りしお思ひきやかく
までにのみふ予のはら人とハ为ぬあふ心にかけ
給ひそいともくしく本意なくこそお不かれあな
かしこ

乙酉孟夏

再云予先に會約をまうしてつとめて人をまろ
こばしめんけといひまんハむけの勝是あるへし
といかさりしとく此會にも心に思はんすといひ
何事にまれいはんと約したれハ面従後言せさる
こゝろにてあやうさ毎に聞ハ傳りし世臣に逆
をもて憤りを旨とすへきにあらしむよりあるまし
きとをなし

けんとん考勧解の一通遜辞謙退なりへしに當
り難くこそ侍れ足下亦後論辨の趣意なけれハ
予も亦此勧解にをきていさゝかうるはしへきに
はあらすその中にけんとん慳貪之とせしことハ
写本洞房語園北女閭紀原人倫訓蒙図彙世事談
綺などにありぬへきよしあれと写本洞房語園ハ
享保五年に撰ふて大名けんとんの廃せし佐よ
りいへることなれハ既に語り傳へし況語園
より後のものをや但人倫訓蒙図彙ハ元禄中の
風俗諸商價の画図を書きつめてあるものなれと
もこハ京師にて撰述せし俗書にて蒔繪師源三
郎とかいふものゝ筆になれるものなれバ江戸

の事ハ謬傳ること多かり當時京摂の冊子ニ江戸の予をうけるにハあやまりも粗あるよしハ彙にいへるか如しされハ只顧にこれらを信用しかへしハ千慮の一失なるへし又子といふ王ハ尊称のよしにて論語義疏並に二程全書なる程子か言を引て教諭せらる事ハ識学なれともさむくりのるハ知まりいなしへ唐山姫周の時子ハ王導の爵なり又子ハ男子の惣称とも云へり當時ハ弟子其師を尊称して子とせると匆論あり志かれとも當時師も亦弟子を子と称せることあり孔子の吾にゆかす彼二三子也なといふ子ハ孔子の為にハ孫弟子なる顔淵か弟子

をさしていふなあらすやこの他ニ子識之なとるいへり此故に墨氏列子の徒ニ至テハその師を推尊て子墨子列子なと上下ニ子を置て称したりこれ孔子世をさりし后にい子とのミ称をるとの軽きくさに於る故とせられたり孔子の時といへとも師弟の間ニハ夫子と称せり夫子の稱ハ朱子の語中ニあり足下の知れる処なれハいはすそハともあれかくまれ予か彙編に足下を先生と称せしに足下は予を指して子といはれしことをいふくたりに今の礼節をもて見れハさならぬ師弟の如し云々といへり此今の礼節といふ今の字則字眼なるをよく〳〵見られ

さや今の字に心あるを見られなハ遠き姫周の
時孔子の子を引くも要なし譬ハ殿と云をハ関
白殿下をまう志ゝ尊称なれとも後世に様と云
称呼の行れしにより殿といへハ様といふより
りいやしく賤したるものゝやうに呼るか如し子
と称せるも古へハ尊称なれとも今ハ尊称にあ
らす同輩朋友の間相對せきして物にかくにハ
某子と称されとも往来の尺牘にも子と称せハ
誰かハ賤せりと思ハさるへきありて予ハ足下
を先生と称せしに足下ハ予を子と称したり今
の礼節を以て見れハ師弟の如しと云へるにさ
れハとてこれを非礼として足下を咎むるにあ

らすかむかりの用心たに足下に知られさるハ
吾非薄の故なりと身を責て歎息せり近之文晁
に足下予を称して老兄と云もれしを云とハ
ひしまより忌嫌ふやうに思われしハ愚意とた
かへり古人も十年肩をくれハ兄として従ふとい
へり大抵兄弟をもて称することハ同年輩なう
へにはるへし又壮弱の人を老と称することハ甚
才徳の老人のことくえとたゝゆるの意なれハ論
なし又それより年節なれとも書を見ることせ
れより博く其の才かその下にあらぬを称して
兄といふをハ論なし志かるを五十六十の老人
ハミつかふも愚老と称されハ老の悟に云あさ

こりきへこ又それより年齢の二十余も三十も
劣りたるものゝ為なは兄といはるゝも何さり
まへにてたうとまるゝとゝは覚へすされはこ
そ礼にも長者前不掃称老といへるにあらすや
さはれこまらの意味なも唐山の古しへ子いさ
ぬくへのわけあるへけれとも只今俗文の手管
にハ却て馬鹿にされるやうに思ふものもあら
ん足下の博識高才もてかゝりのるに心つき
玉はぬにやと思ひしかハいひおくへきことあるを
云云といひしを万こあ朋友の信より出たる諷
諫の微言なりけりいと憚ゐることなれとも足
下の癖として動もすれハ席上にて人をやりこ
むることも志もくこ足下に心つかすやいふら
ん予も亦三度やりこめられしことありしかれ
とも予ハ争ひを好ますいふへきことと辨すへき
をはりてもさやうの時にハ閉口して拙りし故
足下は心つき給はぬなら人もし足下の博識を
もて謙退を旨とし給ハヽ才徳兼備の君子なら
んと思ひつゝ足下を愛する心ある人ハ得いは
ぬをまてをいひしにかくて今勸解の篇のこな
らす近頃足下の動静云為に心をつけて見れハ
去冬より芳春の北峰子にゐなす一段の光耀を増
しぬへしを竊に歎ひ思ふのみ愚者にも一得あ
り賢者も一失なからんや過を改むることハ君

予のおそるゝ所ハ足下元よりあやまちあるに
ハ侍るへからされと予かひが目にハ志り思ひ
しことすへて足下の説を笑せしモハ諷諫の微意
のこされハとてよき説なりせるしと云モハ絶
てなし予か人の説のよきを咲けバよろこひて
いねられず人にも告志らせ物にも志るすことゝ
むかしより今猶志かり一言一句こりとも人の
説をせり説の様に書き侍らハすことハ予か深
く恥る所ハ又過侍れハ怠状を出すも恥とハ思
ハす孔聖すらその過侍るを人の告るものゝ侍れ
ハ丘也幸云と宣へり俗客のあやまり詫文と
学者の怠状とハその差庭逕ありてかあやまち

あらんかい足下に諫められんモをねかふのみか
くの如くあらハ実に忘形の友といふ徳しあな
かしこ

寫本洞房語園巻二

𡢽鈍　寛文二年寅秋中より吉原に始て出来
さる名あり往来の人をよぶ声のかしましく局
女郎より遙におとりて鈍く見けるとて𡢽鈍
と云せさり

按、北女閭紀原その頃江戸町二丁目に仁左
衛門と云者にて一人前の弁当をこしらへ
そハ切を仕込て銀目五分つゝに賣り端々
いせいの下直なるになぞらへけんとんそ
ばと名付しより世間にひろまる又云𡢽鈍
本説の如くなるへし去のし昔より世にけ
んどんなる人なとゝいふに慳貪とつかけ

書けるゝ文字にて愛になき人の上をいふさ
あらば端女郎の呼聲となく愛なきさは故
に云出ることもなけるゝ「し」といへり今云
れたよりて思へばれんだ人の名れ起りは
諸園をもて証すべしその名我は北女閭紀
原の愛なきといふ説是なり此二書をもて
先に余がいひし説の妄なるさるを証すな
に足れりとやいはん